中世イングランド教会と首位権論争(上)

山　代　宏　道

1　はじめに　－問題の設定－

中世イングランド教会における首位権論争（Primacy Dispute）とはなにか。それは、首位大司教（primate）の位をめぐる論争・対立である。イングランド教会を代表する者はだれか。司教たちのあいだで首位者すなわち第一位の者はだれか。この問題をめぐる論争は、カンタベリー大司教ランフルク（Lanfranc, 在位1070－89）が、ヨーク大司教トーマス１世（Thomas I，在位1070－1100）の叙階（consecration）に際し、自分に対して服従誓願（profession of obedience）をなすことを要求したことに始まる。その後1120年代まで約半世紀のあいだ、論争は両大司教ばかりではなくイングランド国王、司教たち、そしてローマ教皇をも巻き込んでいった。

この論争・対立は、両大司教のうちいずれかが死亡し後継者が選任されると、必ず新たな勢いをもってくり返された。その場合、カンタベリー大司教は自己の首位権・優位性を主張したのに対し、ヨーク大司教は自らの首位権を主張することはなく、両者が大司教としては対等であると反論する、というパターンがみられた。

論争における表立っての争点は、ヨーク大司教がカンタベリー大司教に服従誓願をするか否か、の一点にしぼられる。それゆえ、一見しただけでは、今日のわれわれには、なぜかれらがその点に関しあれほど熱心であったのか理解するのが困難であるかもしれない。しかし、この論争は国王や教皇を巻き込むほどの重要性をもっていた。たとえば、大司教ランクフランクによる首位権の主張は、ノルマン征服後のイングランド教会の再編成を意図するかれのカンタベリー大司教としての立場からなされた、という点に注目すべきである。その意

味では、教会分野におけるランフランクの主導権を承認しながら、かれの協力を得て政治的な支配体制を確立しようとする国王ウィリアム１世（William Ⅰ，在位1066－87）にとっても、それは重大な関心を払うべき問題であった。

さらに、論争に関わった大司教座の大司教や参事会員たちの主張・行動を分析することで、当時の大司教や聖職者たちが、自分たちにとって何が重要であると考えていたのか、を知ることができる。

ヨーク教会側の記録を残したヒュー＝ザ＝チャンター（Hugh the Chantor）は、1102年ウェストミンスター会議においてカンタベリー大司教アンセルム（Anselm，在位1093－1109）とヨーク大司教ジェラルド（Gerard，在位1100－08）との間で起った事件を伝えている。

「大司教アンセルムと大司教ジェラルドは、会議の開催を決定した。ウェストミンスター〔修道院、1102年９月29日〕に招集された時、修道士たちは、かれらの大司教〔アンセルム〕のために他のどれよりも高い座席を用意していた。ジェラルドは自分が侮辱されたと感じ、これを行った人物をあからさまにののしり、その座席を蹴り倒した。そして、かれの座席が他方の大司教のそれと同じ高さにされるまで座ろうとはしなかった。自分がかれ〔アンセルム〕になんらの服従も負っていないことを明白に示しながらである。」[1]（〔　〕内筆者、以下同じ）そうした行動は、われわれにとっては、少なからぬ驚きであるが、当事者にとっては重大なことであったにちがいない。[2]

以下、本稿においては、まず、首位権論争に関わった大司教たちを取りあげ、その主張や行動を検討しながら対立過程の概略を跡づけておきたい。[3] その際、ヨーク大司教サースタン（Thurstan，在位1114－40）までの時期とかれの在位期間の２つの段階に分けて検討する。つぎに、歴史的意義を問いながらこの論争の示している特徴を明らかにしていく。カンタベリー大司教による服従誓願の要求に対し、各ヨーク大司教がどの程度、またどのように抵抗していったのかを見ていく場合、３つの観点が重要であろう。

その第１は、大司教の個人的資質の問題である。かれが妥協的人物であったかどうかで、対立の様相は大きく変わっていった。自己に対し、また家族・親

族に対する国王たちの威嚇がなされた時、それに容易に屈したのかどうか。あくまで自己の立場をつらぬくなかで追放される途を選ぶほどであったのかどうかである。前者の事例はヨーク大司教トーマス１世、後者はサースタンにおいて見られる。

第２の点は、大司教とかれの教会参事会との関係である。たしかに、論争・対立の前面に現れていたのは大司教たちであった。しかし、かれらはまた、多くの場合、個人として行動していたわけではない。かれらの主張や立場は、教会の伝統や既得権に基づき、背後には教会参事会が存在していたのである。

首位権論争は、初期の段階においては、ランフランクのような大司教のイニシアティヴによるところが大であった。しかし、両大司教座において参事会員が数的に増加してくるにしたがい、かれらは自分たちの教会の利害に関心を払い、その伝統を守り、いわば自分たちのアイデンティティーを意識するようになる。こうしたなかで、参事会員たちは、時には大司教と立場を異にすることもあった。大司教に対し強力な支持を約束する場合もあれば、自分たちの主張を大司教に強要することで、かれに対する大きなプレッシャーになることもあったのである。

第３の点は、大司教個人の問題とも関わるのであるが、かれとイングランド国王そしてローマ教皇との個人的関係がどうであったのかが重要である。たとえば、ヨーク大司教個人と国王との関係がどのようであったのか、という問題である。カンタベリー大司教の主張を国王が支持しており、服従誓願を行うよう国王もまたヨーク大司教に対し命じていたような場合、それに抵抗し続けることはヨーク大司教として非常に困難なことであった。大司教は国王の圧力に屈する形で服従誓願を行い国王の愛顧をつなぎとめるか、あるいは抵抗し続けてそれを失うかの選択を迫られた。かれとしてはあとの途は避けたかったはずである。もちろん前者も望ましくはなかった。できれば、国王の愛顧を保持しながら、なんとか服従誓願をしないですませる方法を取りたかったはずである。実際に、それを行ったのが大司教サースタンであった。しかし、そのためにかれは長い間の追放生活という苦しみを味わわねばならなかった。また、かれが

そう行動するのを可能にしたのは、国王ヘンリー1世（Henry Ⅰ，在位1100－35）のサースタンに対する信頼であり、大司教就任前から見られた両者間の良好な関係である。

首位権論争は、両大司教が、国王ならびに教皇と結びつきながら対立継続のためのエネルギーを与えられていった、という側面があるように思う。カンタベリー大司教の要求にヨーク大司教がどこまで抵抗しきれるかは、両大司教と国王との関係、国王や教皇からの支持の有無が大きな影響を及ぼした。逆に、国王が両大司教のどちら側をも強力に支持せず、ローマ教皇との間にも一応の和解が成立するなかで、首位権論争は、対立継続のためのエネルギーを失っていったように見える。

2　前　　史　－サースタン以前－

(1)　ランフランクとトーマス1世

ノルマン征服後、国王ウィリアム1世は、イングランド教会の支配を確立するため2人の信頼のおける人物を大司教座に据えた。その1人がトーマス＝オヴ＝バイユー（Thomas of Bayeux）である。かれは、バイユー司教オドーの被保護者（protégé）でバイユー司教座教会の財産管理係（treasurer）であったが、1070年5月24日ウィンザー会議でヨーク大司教に任命された。もう1人がカーン修道院長であったランフランクで、かれは同年8月15日にカンタベリー大司教に任命された。

以上のように、任命順序はトーマスの方が先であったが、かれの叙階は、8月29日属司教たちによるランフランクの叙階後に延期されてしまった。チブノール（M. Chibnall）は、その遅れが、カンタベリー側によって主張されヨーク側によって反対された首位権をめぐる複雑な問題ゆえであった、と主張している。[4)] ランフランクはトーマスに対し、叙階の条件として宣誓をともなう服従誓願（a profession of obedience reinforced by an oath）を自分になすことを要求した。その要求は、古くからの慣習によるものであると主張されたが、イングランドあるいはフランスのいずれにおいても類似の慣習は知られていな

かったようである。[5)]

ところで、カンタベリー教会は、聖アウグスティンの時代以来、全イングランドの「母教会」として位置づけられてきていた。[6)] カンタベリー大司教座附属クライスト＝チャーチ修道院の修道士であったエドマー（Eadmer）は、カンタベリー側の立場で記録を残している。かれは、カンタベリー教会を「全イングランド、スコットランド、アイルランドそして隣接する島々の母なる教会」と呼び、それ以外の教会を「娘教会」として捉えている。[7)]

アングロ＝サクソン時代からの卓越した地位と伝統に基づきながら、ランフランクはカンタベリー教会をイングランドの首位教会として位置づけようとした。かれが首位権理念をどこから引き出したかという点については、トレド教会規定を重視するものやアングロ＝サクソン的伝統を重視するものなど諸説がある。[8)] ここでは、カンタベリー大司教に伝統的に与えられてきた卓越性を、トレド大司教によって主張された首位権に関連づけながら、イングランド的伝統を強力なものにしていった、とするヴォーン（S. N. Vaughn）の見解を支持しておきたい。しかし、同時に、ヴォーンは「ランフランクは服従誓願を要求するという政策を開始した（Lanfranc initiated a policy of requring written professions of obedience）」と指摘している点にも注目しておくべきであろう。こうしたランフランクの政策は、イングランドのすべての司教たちをかれの個人的権威に服従させる意図をもつものであった。[9)]

カンタベリー大司教からの服従誓願の要求に対し、ヨーク大司教が反論することなくすぐに応じたわけではもちろんない。首位権論争を通じて見られる両大司教の主張の典拠となったものは、あまり多くはない。また、両者がなした主張のパターンもしばしばくり返された。ここでは、まず、両者の主張の典拠を概観しておきたい。ヨーク側が教皇グレゴリー１世（Gregory Ⅰ，在位590－640）のイングランド布教計画に言及しながらかれらの立場を守ろうとする時には、カンタベリー側は過去に実際に起こったことに言及しながら反論した。他方、カンタベリー側がその首位権に都合のよいなんらかの典拠を提出する場合には、ヨーク側は両大司教の対等性に言及した教皇ホノリスウ１世（Honorius

Ⅰ，在位625－38）の規定を引用しながら、カンタベリー側の典拠の無効性を主張していった。[10)]

601年教皇グレゴリーⅠ世は、イングランド布教に関しカンタベリー大司教アウグスティン（Augustin，在位597－604）への手紙を送った。その中で、教皇はロンドンとヨーク両市が大司教座として機能する、いわば古い「ローマ帝国組織」の上に基礎を置くイングランド布教体制が可能であるとの考えを抱いていた。アウグスティンはすみやかにカンタベリーからロンドンへと移り、そこから12名の属司教を叙任する。他方、１名の司教をヨークへと送り、かれにもまた12名の属司教を叙任させる。アウグスティン生存中は、ヨーク司教はかれに服従するが、死後は独立する。ヨークとロンドンの各首都大司教（metropolitan）は教皇からパリウムを受け取る。両者の優先順位は叙階された順序で決定される。[11)] 以上のすべての内容が手紙において明言されているわけではないが、そのように解釈するのが妥当であろう。しかし、こうしたグレゴリー１世の計画は、結局実現しなかった。カンタベリー大司教たちはロンドンへと移らなかったし、ヨークは 735年まで大司教座にはならなかった。さらに、前者はついに12名の属司教をもつが、後者の場合その数に達することはなかった。[12)]

本稿で考察対象としている1070年代から1120年代までの時期について、信頼に値しまたかなりの客観性のある記録を残しているのがマームズベリーの修道士ウィリアム（William of Malmesbury）である。[13)] かれは、読者のために首位権論争について典拠となるべき記録を選択的に記載している。ウィリアムが引用する教皇グレゴリー１世からカンタベリー大司教アウグスティンへの手紙の内容全部はつぎのごとくである。

「あなたの裁治権を、あなたが叙任する司教たちに、あるいはヨークの司教によって叙任されたような人々〔司教たち〕のみではなく、ブリテンのすべての司祭〔司教〕たちに対してもまた、われらが主イエス＝キリストの権威によって及ぼしなさい。」[14)] ここには、カンタベリー大司教の優位性のみが示されており、ヨーク大司教との具体的関係すなわち優先順位の決め方を示す部分は引用

されていない。その意味では、カンタベリー側に好都合な典拠となっている。修道士ウィリアムが、年代記の作成にあたり、カンタベリー資料を利用した可能性が強いことを考慮すると、その点も納得できよう。[15)]

つづいてウィリアムは、教皇ボニフェイス5世（Boniface V，在位619－25）からカンタベリー大司教ユストゥス（Justus，在位624－27）への手紙を引用している。そこでも、「使徒たちの第一人者である聖ペテロの権威によって、カンタベリー市が、以後、全ブリテンの首都大司教座として尊ばれるべきことを命じ、イングランド国王のすべての〔司教〕管区が前述の司教座の首都大司教座教会に従属すべきことを、不変的に規定する」ことが強調されている。[16)]

これに対して、ヨーク側の主張の典拠としてしばしば言及されたのが教皇ホノリスウ1世の規定である。しかし、これの内容を詳しく伝える記録は見当たらないようである。ヨーク教会の記録を残したヒュー＝ザ＝チャンターは、トーマス1世とランフランク両大司教任命に関連した記述で、その規定に言及している。「この時、カンタベリーとヨークの大司教たちのために、教皇ホノリウスによって定められた慣習を守ることは不可能であった。〔その慣習は〕かれらのうちのいずれかが死んだ時には、かれの後継者は他方〔の大司教〕によって叙階されるべきである、というものである。〔しかし〕あとで叙任されたランフランクは、かれ自身の属司教たちによって、最初に叙階された。」[17)] ヨーク側は、ここに言及されたホノリウスの規定に基づき、ヨーク大司教の叙階権限を主張し、その限りでのカンタベリー大司教との対等性を強調していったのである。[18)]

以上、首位権論争において両大司教が自分たちの主張を基礎づけた典拠について概観してきた。いずれも、それぞれの立場に都合のよい記録が残され、そしてある場合には無視されてきている、といわざるをえない。ここに、この論争が解決困難であったことの痕跡を読みとることができる。また、こうした文書証拠は論争解決にとってなかなか決定的とはなりにくく、その分だけ他の要素、たとえば国王による政治的圧力や教皇の支持といったものが、論争の継続・終結にとって大きな影響を及ぼしていった、という側面があったといえよう。

ところで、カンタベリー大司教ランフランクとヨーク大司教トーマス1世との間の服従誓願をめぐる問題は、両者が1071年教皇アレクサンダー2世（Alexander II，在位1061－73）からパリウムを受けるためにローマを訪問した際に持ち出された。しかし、双方とも決定的な証拠を提示できないまま、教皇の判断によって、その問題ならびにドチェスター、ウスター、リッチフィールド各司教座の所属問題は、翌年イングランドで開催される会議で論議されることになった。チブノールは、両大司教が各大司教座の先任者たちの伝統的権利についてまだ学んでいる途中であった、と指摘する。ウィリアム＝オヴ＝マームズベリーは、教皇アレクサンダー2世から国王ウィリアム1世への手紙を引用し、それらの問題の検討がランフランクの主導で行われるのを、教皇が指示したことを示唆している。[19]

1072年教皇アレクサンダー2世の命令と国王の許可のもとイングランドで会議が開催される。ウィリアム＝オヴ＝マームズベリーによると、カンタベリー大司教が主張した首位権問題と司教たちの所属問題が論議された。討議後、ヨーク教会はカンタベリー教会そして全ブリテンの首位者としての同大司教に服従すべきこと、しかし、ダラム司教の服従ならびにリッチフィールド司教管区の境界とハンバー川を越えたスコットランド国境までの地域、また同川のこちら側で正当にヨーク教会に所属するものは、ヨーク大司教とかれの後継者たちに永久に属することを、カンタベリー首都大司教（metropolitanus）は認める、ということが決議された。[20]

いま、首位権論争との関連でみると、注目すべきは、同会議に言及したウィリアムのつぎのような記述である。「ランフランク大司教は、かれの先任者たちの古い慣習からヨーク大司教がカンタベリー大司教に対して宣誓を伴った服従誓願をなさねばならないことを証明した。しかし、国王に対する尊敬から、かれはヨーク大司教トーマスからの宣誓は免除した。そして、かれの服従誓願文（written profession）のみを受け取った。しかし、トーマスの後継者たちから、服従誓願といっしょに宣誓をも受け取ることを選ぶかもしれないかれ〔ランフランク〕の後継者たちにとっての先例となすことなく〔そうしたので

あった〕。[21]」

ここで問題となるのは、ランフランクに対して行ったとされるトーマスの服従誓願をめぐる解釈である。ウィリアム＝オヴ＝マームズベリーの記述に従うと、ランフランクが宣誓なしの服従誓願文を受けたのは特別措置であったのであり、かれの後継者たちが宣誓を要求するかもしれないということを拘束するものではなかった、ということになる。

ウィリアムは、この記述箇所につづけて、大司教トーマスの服従誓願文とみなされるものを挿入している。ここで関連部分のみ引用すると、「今、ヨーク教会の首都大司教に叙任された私トーマスは、あなたの〔主張の〕典拠を聞きそして知ったあとで、あなた、カンタベリー大司教、そしてあなたの後継者たちに対して、教会法的服従の誓願をなします。……私は、あなたに対しては無条件に、しかし、あなたの後継者たちに対しては条件的に服従を約束しました。[22]」（傍点筆者）というものである。

引用文後段の後継者たちに対する条件的服従ということの意味は明白ではないが、前段からは少なくともトーマスがランフランクの後継者たちに対しても服従誓願を行なったということが指摘されている点に注目すべきである。こうしてみると、カンタベリー側にとって、トーマスの服従誓願についての特別措置の内容は、それが宣誓を伴っていなかった、ということであった。そして、ヨーク大司教トーマスの服従誓願の行為は、カンタベリー大司教ランフランクの後継者たちにまで及んでいく、と理解されていたはずである。

しかし、この点についてのヨーク側の理解や記録は大きく異なっているのである。ヒュー＝ザ＝チャンターによれば、大司教トーマスは叙階された時（1070年12月25日）[23]にただ一度服従誓願をなしたのみであり、それはランフランクに対しては絶対的であったかもしれないが、かれの後継者たちに対してはそうではなかった、といわれる。ヒューはさらに、1072年の会議記録もカンタベリー側の偽造（fabrication）として退けるのである。[24]

ニコール（D. Nicholl）は、トーマスが叙階前にランフランクの要求に抗議したうえで服従誓願文を提出したが、その誓願の適用をランフランク個人に制

限しており、トーマス自身をランフランクの後継者たちに縛りつけてはいなかった、と解釈している。[25] チブノールは、トーマスがかれの生涯の間ランフランクに対し個人的に服従する用意があったが、かれの司教座（ヨーク教会）の諸権利を除いてであった、とする。[26] ここでは、トーマスの服従誓願はランフランクにのみ適用された、とする説を支持しておきたい。

ところで、1072年イングランドでの会議についてもうひとつの問題点は、ランフランクをイングランドの首位大司教とした決議に関するものである。すなわち、それがローマ教皇によって承認されなかった、ということである。さらに、そのことが首位権論争を長びかせる一因にもなった、という事実である。では、なぜ教皇の承認が得られなかったのであろうか。実は、その決議が教皇によって受け入れられなかった理由のひとつは、その会議が国王宮廷において行われたことにある。これまで1072年の会議と表現してきたが、ウィリアム＝オヴ＝マームズベリーによると、それは2つの集会から成り立っていたようである。首位権問題等は、最初、ウィンチェスター城内の国王チャペルにおいてイースターに討議され、その後、聖霊降臨節(ペンテコステ，5月27日)にウィンザーの国王宮廷において決議された。[27] その集会には国王や王妃とならんで、教皇使節でローマ教会副助祭のハーバート(Hubert)もたしかに出席していた。しかし、ニコールも主張するように、ローマ教皇庁では、それが国王宮廷での会議決議であったために決定的であるとはみなされなかったようである。[28]

しかし、この時期のローマ教皇庁によるヨーロッパ各地の首位大司教承認問題については、教皇を首位とするヒエラルヒーの確立をめざす教皇庁の政策といった別の考察要素も含まれてくる。その点については、筆者はすでに別稿において少し言及したことがある。[29] ここではひとまず、カンタベリー大司教ランフランクの首位権がイングランドでは決定されたにもかかわらず、ローマ教皇によって、さらにもちろんヨーク教会側によっても承認されなかった、という事実を確認しておきたい。

(2) アンセルムとジェラルド

ランフランクの死後、カンタベリー大司教座は空位状態に置かれていたが、病気になった国王ウィリアム2世（William II，在位1087－1100）は、司教たちの助言を受け入れ、ベック修道院長であったアンセルムを大司教に任命した。アンセルムの大司教就任以後、かれに同行しながらカンタベリー教会を中心とした記録を残したのが修道士エドマーである。かれによると、1093年9月25日アンセルムはカンタベリーへやって来て、修道士、聖職者そしてすべての人びとの熱意のうちに、大いなる荘厳さをもって「神の教会の首位者として即位させられた（he was enthroned as primate of the Church of God）」。ここで、アンセルムが「首位者」とみなされたのかどうかは、本稿のテーマである首位権論争にとって重要な点である。上記の表現はダグラス（D. C. Douglas）の訳であるが、エドマーの原文は、どちらかというとボサンケット（G. Bosanquet）の「かれは神の教会を治めるため大司教座に登った（he ascended the Archbishop's throne to rule the Church of God)」との訳にちかい。[30)]

しかし、カンタベリー大司教となったアンセルムには、自らを首位大司教として位置づける認識がすでに生じていたと考えられる。それは、大司教就任前後にかれが国王ウィリアム2世に対してなした要求においてみられる。そこでは、カンタベリー教会所領の回復などと共に、宗教事項において自分が国王の第一助言者として認められること、イングランドにおけるすべての高位聖職者からの服従誓願文の受理、さらに国王がかれの首位大司教と相談しながら適切に空位聖職を充たすことなどが要求されているのである。[31)]

こうした自覚をもつアンセルムは、同年12月自分の叙階に際し、ヨーク大司教トーマス1世からの服従誓願を要求し、さらに自分をブリテンの首位大司教として叙階することを要請したのであった。[32)] アンセルムにしてみれば、前任者ランフランクがヨーク大司教トーマスから服従誓願文を獲得したことは、カンタベリー大司教の首位権の確認を意味していた。[33)] 上記の要求は当然のことと考えられたにちがいない。しかし、トーマスはそれを拒絶し、結局、アンセルムを首都大司教として叙階したようである。

アンセルムの叙階をめぐるこの間の事情は、いま、バーロー（F. Barlow）の簡潔な整理によるとつぎのようであった。まず、カンタベリー側が文書においてアンセルムを「ブリテン全体の首都大司教（metropolitan of the whole Britain）」と述べるというへま（間違い）をした。つぎに、それが「全ブリテンの首位大司教（primate of all Britain）」と修正された時、エドマーによると、トーマスは満足して叙階を行ったという。しかし、ヒュー＝ザ＝チャンターは、トーマスがアンセルムを「カンタベリーの首都大司教（metropolitan of Canterbury）」としてのみ叙階した、と主張するのである。[34)]

エドマーに従えば、カンタベリー大司教はブリテンを代表する首位者と認められたことになり、ヒューによれば、ヨーク大司教と対等なもうひとりの首都大司教にすぎない、ということになる。ここでもまた、立場の違いによる記録上の相違がみられるわけであるが、バーローは、トーマスがアンセルムに対して服従誓願を更新したようにはみえないことから、1070年と1093年の出来事についてカンタベリー側記録には大いに議論の余地がある、と指摘するのである。[35)] サザーン（R. W. Southern）も、この時点でカンタベリー側は最初の敗北を喫したことを示唆している。[36)]

アンセルムの大司教在位期間は、2度にわたる追放期間（1097－1100年，1103－06年）を含みながらも、イングランドにおける聖職叙任権闘争の時期にあたっており、[37)] 国王や教皇との関係でアンセルムが大司教位をどのように捉えていたのかは重要な問題である。ヴォーンの見解に従うと、アンセルムはカンタベリー大司教としての明確な理念をもっていた。すなわち、それは全ブリテンの首位大司教として固く守るべき「正しい秩序（right order）」の考えであった、という。国王とローマ教皇との対立のなかにあって、かれはカンタベリーの首位権を高めるために全力を傾けた。[38)]

アンセルムの「正しい秩序」では、イングランド統治において、政治的支配を行う国王とならび、首位大司教はあたかも「ひとつの犂をいっしょにひく神の雄牛」であった。そこでは国王と首位大司教とは共同統治者として認識されることになる。さらに、イングランド教会組織にとって「正しい秩序」とは、

首位大司教としてのカンタベリー大司教にすべての司教たちが服従するものとして考えられていたのである。[39)]

司教たちがアンセルムに対して行っていた服従誓願については、エドマーの記録に興味深い事例が見出せる。すなわち、それは服従の取り下げという事態である。1095年ロッキンガム会議において、大司教アンセルムと国王ウィリアム2世はローマ教皇承認問題等をめぐって対立していた。その際、国王の意向に従いながら、司教たちは修道院長たちと共に、大司教に対するかれらの服従を公式に取り下げているのである。それに対し、アンセルムは、首位大司教そして精神的父親の両方である自分にかれらが負っている服従・信頼・友情のすべてを拒否するという司教たちの行動は正しくない、と諫めた。[40)]国王の圧力によって、司教たちは自分たちの大司教への服従誓願を取り下げたのである。

1100年ヘンリー1世の即位とともにアンセルムの帰国が実現する。しかしまもなく両者の間には、俗人による聖職者の叙任をめぐる対立が引き起こされてくる。そうした事態にあって、アンセルムは、ヘンリーの要請を受けて俗人叙任の禁止に関する教会決議の緩和を求めて教皇に働きかけたり和解のために努力する。他方、ヘンリー1世が、1102年9月ウェストミンスターでの首位大司教会議（primatial council）の開催を許したことは、アンセルムにとって重大な成果であった。[41)]

同会議は、アンセルムが大司教就任以来、ウィリアム2世の治世から願っていた主要な目標のひとつを達成したことを意味する。それは、「全ブリテンの首位大司教」としてのカンタベリー大司教が開催するイングランド高位聖職者による改革会議であった。ウィリアム2世が許可しなかったそうした位置づけをもつ会議をヘンリー1世は承認した。アンセルムは、首位大司教としての権威をもってイングランド教会改革に立ち向かうことができたのである。[42)]

ところで、1100年国王ヘンリー1世は、トーマス1世死後空位になったヨーク大司教座にジェラルドを任命した。ジェラルドはかつて国王ウィリアム1世、同2世の書記係(royal chancellor)であった。[43)]当時すでにヘリフォード司教（在位1096－1100）であったので、この措置は転任である。かれは1096年ヘリ

フォード司教即位時に、カンタベリー大司教アンセルムに対して服従誓願を行っていた。したがって、大司教位への転任に際しては、アンセルムに対し再び服従誓願を行おうとはしなかった。ヘンリー1世は、以前の服従誓願を有効なまま保持する約束をジェラルドにさせることで、妥協的決着を図ったようである。[44)]

バーローは、アンセルムがカンタベリー教会の威厳の大いなる擁護者ではなかった、と主張することで、アンセルムが国王の妥協的措置を受けいれた理由を説明しようとしている。[45)] この点でのアンセルム解釈が、前述のヴォーンのそれと異なっていることに注目しておきたい。つづいてバーローは、これも先述した1102年9月ウェストミンスター会議での座席の高さをめぐるジェラルドの行動を紹介したうえで、そうした行為はアンセルムにとってさえ目に余ることであった、と指摘する。その結果、アンセルムは、教皇パスカル2世 (Paschal II, 在位1099—1118) に働きかけ、同年12月12日付教皇書簡[46)]をもってジェラルドに対しアンセルムに服従誓願をなすよう命じさせたのである、としている。[47)]

これに対し、ヴォーンは、そもそも大司教アンセルムが国王ヘンリー1世の妥協的措置に従ってジェラルドからの服従誓願を免除したとは解釈しない。12月12日付教皇書簡は、俗人叙任の禁止をめぐり国王と対立している大司教を支持することなく国王支持を表明していたジェラルドを懲戒し、アンセルムに対して服従と従順を誓うよう命じたものである、とみなしている。[48)]

このようにバーローとヴォーンとでは、カンタベリー大司教としてのアンセルムの評価が異なるし、その結果、パスカル2世からの手紙がジェラルドに服従誓願を命じるに至った経過についての解釈も相違しているのである。ヴォーンは、エドマーが、上記の教皇命令を引き出したことをアンセルムの最高の業績であり、かれの在位期間のクライマックスとして位置づけていることに注目している。さらに、パスカルはイングランドにおけるいかなる高位聖職者も全ブリテンの首位大司教アンセルムと同等の権威をもたないことを確認し命じたのである、と強調する。しかし、この点については、教皇パスカルが首位権の確認を与えたのかどうか、また、もしそうなら、それはなぜか、といった疑問

が残るのである。[49)]

他方、バーローは、ジェラルドを中心に事態を見ながら、服従誓願を行えとの教皇命令にもかかわらず、すぐあとに続くアンセルムの2度目の追放により、ジェラルドはアンセルム帰国後開かれる1107年ロンドン会議までその命令に従うのを避けることができた、と指摘する。また、その時点ではジェラルドはかれの人生のほとんど終りにあった、と強調することで、[50)]ジェラルドにとってアンセルムへの服従誓願がもはやそれほどの重大事ではなかったかのようにみなしている。しかし、この点についてはあとで言及するように、大司教ジェラルドとヨーク教会参事会との関係という観点からすれば、その行為はジェラルドにとって死後における非常に重大な結果を引き起こすことになったのである。

(3) トーマス2世

ジェラルドの死によって空位となったヨーク大司教座には、さきの大司教トーマス1世の甥であったトーマス2世（Thomas II，在位1108－14）が選任された。かれはウスター司教サムソンの息子であり、バイユー司教リシャールとは兄弟であった。また、トーマス2世はヨーク教会参事会において教育・訓練を受けてきており、カンタベリー側の主張に反対するいわばヨーク教会の大義について十分に熟知し自らも関わってきていた。[51)]

他方、カンタベリー大司教座ではアンセルムがその在位末期（1109年4月21日死亡）を迎えていた。かれは、先例にならって、トーマス2世が自分に服従誓願をなすことを要求する。もちろん、トーマスはそれに反対した。[52)]

ところで、この時期になると、ヨーク側の反対の仕方をめぐって、それまでとはちがった現象が見られるようになっていたことを重視せねばならない。では、その変化とはなにか。それは、反対行動の前面に大司教が立っていたのは依然として同じであるが、場合によっては教会参事会が相当に積極的な行動をとるようになった、という事実である。参事会員たちの行動は、多くの場合は大司教を支持するものであったが、時にはかれの行動を規制するプレシャーとして働く可能性もあった。[53)]

ヨーク参事会員たちの行動についての報告は、カンタベリー側の立場で記録を残したエドマーにより、非難すべき対象として伝えられている。1108年ヨーク教会の参事会員たちは、アンセルムに対して独自に手紙を送り、もしかれらの大司教トーマス2世が服従誓願をなすなら、かれらはトーマスを支持しないばかりかローマへと上訴する用意がある、と述べた。エドマーはつけ加えて言う。参事会員たちはアンセルムが年老いて病気で疲れ果てているのをよく知っていた、また、かれがまもなく死亡するであろうと予想していた、と。[54] エドマーのこの箇所の叙述に関するニコール (D. Nicholl) の論評は興味深い。エドマーは、このような行動をとった参事会員たちがどのような評判を得ていたか想像されるにまかせ、自分は「なさけ深い沈黙 (charitable silence)」の方を好んでいる、とみなす。[55]

こうしたカンタベリー側からの非難に対して、ヨーク側のスポークスマンであるヒュー＝ザ＝チャンターも沈黙してはいない。かれは、あからさまな不快表明をする。「カンタベリーの修道士たちは不正なものをめざし、恥じらいもなく要求することを止めない。かれらは、目覚めている間それについて考え、眠っている間それを夢見る。そして、苦悩にやつれる。また、かれらは、成功するならいかなる手段でそれを再び手に入れるかは気にしない」と。[56]

参事会員たちは、独自の行動をとることで、実質上、自分たちの大司教トーマス2世の手から服従誓願問題を取りあげてしまった。かれらは、参事会長をローマへと送り、また国王に対してロビー活動をなし、さらに教皇使節枢機卿ウルリク (Ulric) からは自分たちへの支持を獲得したのであった。[57]

では、なぜヨーク教会の参事会員たちは自分たちの大司教にプレシャーをかけたり、独自の行動をとるに到ったのであろうか。ここでもニコールの論評に耳を傾けたい。参事会員たちは、同じ参事会で教育・訓練を受けてきたトーマス2世については、かれの弱点をよく知っていたのである。[58] 服従誓願問題と直接に結びつくわけではないが、「かれはずんぐりとよく肥えており」、肥満ゆえになかなか動くこともできず、過食から大司教としては若くして亡くなる。[59] 参事会としては、こうした弱点をもつトーマスに自分たちの代表として多くを

なすことを期待できなかったのであろう。

逆に、大司教トーマス2世も参事会員たちのことをよく知っていた。かれは最近、アンセルムへの服従誓願を行った前任大司教ジェラルドに対し、かれらがジェラルド死後に加えた仕打ちを目撃していた。参事会員たちは、自分たちの大司教であったジェラルドの遺骸がかれらの教会内に埋葬されるのを拒絶した。そして、遺骸がポーチの外のあまり価値のない場所に埋められるのさえ、いやいやながら許したのであった。[60] こうした参事会員からの服従誓願拒否の要請を、トーマスは大きなプレシャーと感じていたにちがいない。

しかし結局、ヨーク大司教トーマス2世は、バーローの指摘するように、死に瀕していたカンタベリー大司教アンセルムには抵抗できたけれども、国王ヘンリー1世の命令とみずからの親族にかけられた圧力、さらに司教たちの説得によって、かれの教会参事会の大義を放棄したのである。アンセルムはすでに死亡していた。トーマスは、1109年6月27日叙階前に、名指しできないカンタベリー大司教に対し自分のみを拘束する服従誓願をなした。[61] この事態についてニコールの表現を借りれば、トーマスは、「上〔国王〕と下〔参事会〕の碾き臼の石の間でひかれて(ground between upper and nether mill－stones)」、[62] そうした行動をとったのである。

以上、これまでは首位権論争に関わった大司教たちのうち、ヨーク大司教サースタンまでの時期について、かれらの主張や行動を検討してきた。次には、カンタベリー側の服従誓願の要求を拒否することにはじめて成功したサースタンの在位期間について対立過程を跡づけ、さらに首位権論争の歴史的位置づけを行っていきたい。(未完)

註

1)　"Postea placuit Anselmo et Girardo archiepiscopis concilium celebrare. Quo in Westmonasterio congregato, cum monachi archiepiscopo suo sedem singulariter celsam parassent, Girardus indignatus, et dei odium ei qui sic paraverat vulgariter orans, pede subvertit, nec sedere voluit, donec sibi cum archiepiscopo sede parata, liquido volens ostendere, ei nullam subieccionem debere." C. Johnson ed., *Hugh The Chantor*,

The History of the Church of York 1066－1127〔以下, *HC*と略記〕. London, 1967 (1961). p.13 ; D. Nicholl, *Thurstan, Archbishop of York (1114－1140)*. York, 1964. pp.38-9.

2) 1072年ウェストミンスター会議で、イングランド事情に通じていなかったカンタベリー大司教ランフランクは、年長司教たちに着席順について質問している。W. Stubbs ed., *Willelmi Malmesbiriensis Monachi De Gestis Regum Anglorum*〔以下, *WMGRA*と略記〕, 2 Vols. RS 90. London, 1964 (1889). II, p.353 ; J. A. Giles ed., *William of Malmesbury's Chronicle of the Kings of England*〔以下、*WMCKE*と略記〕. London, 1968 (1847). p.323

3) F. Barlow, *The English Church 1066－1154*. London, 1979. pp.39－45 ; C. D. Godfrey, *The Church in Anglo－Saxon England*. Cambridge, 1962. pp.421－3.

4) M. Chibnall, *Anglo－Norman England 1066－1166*. Oxford, 1986. pp.39－40.

5) D. Whitelock, M. Brett and C. N. L. Brooke eds., *Councils and Synods : With Other Documents Relating to the English Church. Vol. I, A. D. 871－1204*〔以下,*CS*と略記〕. Oxford, 1981. pp.586ff. ; Nicholl, *op. cit.*, p.36.

6) M. Brett, *The English Church under Henry I*. Oxford, 1975. p.69.

7) M. Rule ed., *Eadmeri Historia Novorum in Anglia*〔以下, *EHN*と略記〕. RS 81. London, 1965 (1884). pp.26－7 ; G. Bosanquet trans., *Eadmer's History of Recent Events in England*. London, 1964. pp.27－8 ; D. C. Douglas ed., *England Historical Documents, II. 1042－1189*. London, 1953. p.652.

8) すでに960年教皇ジョン12世からカンタベリー大司教ダンスタンが首位権を与えられた、とする説もある。Cf. *CS*, pp.88ff. ; W. Stubbs ed., *Memorials of St. Dunstan, Archbishop of Canterbury*. RS 63. London, 1965 (1874). pp.296－8. この点に関する河井田研朗氏（福岡大学）のご指摘に感謝いたします。

9) S. N. Vaughn, "St. Anselm and the English Inverstiture Controversy reconsidered", *Journal of Medieval History*, 6 (1980), pp.61－86. esp. p.66.

10) Nicholl, *op. cit.*, p.36.

11) B. Colgrave and R. A. B. Mynors eds., *Bede's Ecclesiastical History of the English People*. Oxford, 1981 (1969). pp.104－7.

12) Nicholl, *op. cit.*, p.36.

13) *WMGRA* ; *WMCKE*.

14) "Tua fraternitas non solum eos episcopos quos ordinaverit, neque hos tantummodo qui per Eboracensem episcopum fuerint ordinati, sed etiam omnes Brittanniæ sacerdotes, habeat, Deo Domino nostro Jesu Christo auctore, subjectos." *WMGRA*, II. p.347 ; *WMCKE*, p.319 ; Colgrave&Mynors, *op. cit.*, pp. 106－7.

15) *CS*, p.592 n. 2.

16)　"sed magis ex auctoritate beati Petri apostolorum principis id ipsum præcipientes firmamus, ut in Dorobernia civitate semper in posterum metropolitanus totius Britanniæ locus habeatur ; omnesque provinciæ regni Anglorum, ut præfati loci metropolitanæ ecclesiæ subjiciantur, immutilata et perpetua stabilitate decernimus." *WMGRA*, II, p.347 ; *WMCKE*, p.319.

17)　"Tunc non potuit servari illa consuetudo a papa Honorio inter Cantuariensem et Eboracensem archiepiscopos instituta, ut altero decedente successor eius ab altero superstite vicissim consecraretur. Lanfrancus, licet posterius investitus, a suffraganeis suis prius consecratus est." *HC*, p.2.

18)　ヨーク大司教の叙階権限について、ウィリアム＝オヴ＝マームズベリーの記述は、一応それが認められていたことを示している。「もしカンタベリー大司教が死んだなら、ヨーク大司教はカンタベリーにやって来る。そして前述の〔カンタベリー〕教会の司教たちと共に、選出された人物を適切にかれの合法的首位大司教として叙階する。しかし、もしヨーク大司教が死んだなら、かれの後継者は、国王から大司教位の贈与を受けたのちカンタベリーあるいはカンタベリー大司教が定める場所へとやって来て、かれから教会法的叙任を受ける。」*WMGRA*, II. p 351 ; *WMCKE*, p 321. しかし、ここでも、叙階方法・場所に関して、またカンタベリー大司教を首位大司教として叙階することなど、カンタベリー側に好都合な説明となっている。

19)　*CS*, p.587 ; Chibnall, *op. cit.*, p.40 ; *WMGRA*, II. pp.347－8 ; *WMCKE*, pp.319－20.

20)　*CS*, pp.601－2 ; *WMGRA*, II. pp.349－52, esp.350 ; *WMCKE*, p.320.

21)　"Quod autem Eboracensis archiepscopus professionem Cantuariensi archiepiscopo etiam cum sacramento facere debeat, Lanfrancus Dorobernensis archiepiscopus ex antiqua antecessorum consuetudine ostendit ; sed, ob amorem regis, Thomæ Eboracensi archiepiscopo sacramentum relaxavit, scriptamque tautum professionem recepit, non præjudicans successoribus suis sacramentum cum professione a successoribus Thomæ exigere voluerint." *WMGRA*, II. pp.350－1 ; *WMCKE*, pp.320－1.

22)　"Propterea ego Thomas ordinatus jam Eboracensis ecclesiæ metropolitanus antistes, auditis cognitisque rationibus, absolutam tibi Lanfrance, Dorobernensis archiepiscope, tuisque successoribus, de canonica obedientia professionem facio ; et quicquid a te vel ab eis juste et canonice mihi injunctum fuerit, servaturum me esse promitto. De hac autem re, dum a te adhuc ordinandus essem, dubius fui ; ideoque tibi quidem sine conditione, successoribus vero tuis conditionaliter, obtemperaturum me esse promisi." *WMGRA*, II. p.352 ; *WMCKE*, p.322.

23)　F. M. Powicke and E. B. Fryde, *Handbook of British Chronology*. London, 1961. p.264.

24) *HC*, pp.4—5 ; J. Raine ed., *Chronica Pontificum Ecclesiae Eboracensis*, 3 vols. RS 71. London, 1965(1879—94). II. pp.101—2 ; *CS*, p.591 n.1.

25) Nicholl, *op. cit.*, p.36.

26) Chibnall, *op. cit.*, 40.

27) *WMGRA*, II. P.351 ; *WMCKE*, p.321 ; *CS*, p.592 and n. 1.

28) Nicholl, *op. cit.*, pp.36—7

29) 拙稿「アングロ＝ノルマン国家再考」『史学研究』183 (1989), pp.32—51. 特にp.40.

30) "Venit post hæc Cantuariam, vii. Kal. Octobris, atque immensa monachorum, clericorum, totiusque plebis alacritate susceptus, ad regendam ecclesiam Dei locum pontificis magno deductus honore conscendit." *EHN*, p.41 ; Bosanquet, *op. cit.*, p.42 ; Douglas, *op. cit.*, p.659.

31) *EHN*, pp.39—40, 47—9 ; Vaughn, *op. cit.*, 64.

32) *EHN*, pp.42—3.

33) Vaughn, *op. cit.*, 66.

34) Barlow, *op. cit.*, pp.42—3.

35) *Ibid.*, p.43.

36) R. W. Southern, "The Canterbury Forgeries", *E. H. R.*, 73 (1958), pp. 193—226. esp. p.207.

37) 拙稿「1107年ロンドン協約の成立 —「英国叙任闘争」についての一考察 —」『史学研究』126 (1975), pp.40—53.

38) Vaughn, *op. cit.*, p.62

39) *Ibid.*, pp.67, 69.

40) *EHN*, p.63 ; Bosanquet, *op. cit.*p.65. ; Douglas, *op. cit.*, pp.665—6.

41) *CS*, pp.668ff. ; *EHN*, p.141 ; Vaughn, *op. cit.*, p.69.

42) *EHN*, p.141 ; Vaughn, *op. cit.*, p.69.

43) *HC*, p.12.

44) *HC*, p.13 ; Barlow,*op. cit.*, pp.77, 43.

45) Barlow, *op. cit.*, p.43.

46) P. Jaffé ed., *Regesta Pontificum Romanorum*. 1851. No.4431 ; *EHN*, p.216 ; Bosanquet, *op. cit.*, pp.230—1.

47) Barlow, *op. cit.*, p.43.

48) Vaughn, *op. cit.*, p.70.

49) *EHN*, pp.215—6 ; Vaughn, *op. cit.*, p.70.

50) Barlow, *op. cit.*, p.43.

51) N. E. S. A. Hamilton ed., *Willelmi Malmesbiriensis Monachi De Gestis Pontificum Anglorum*〔以下、*WMGPA*と略記〕. RS 52. London, 1964 (1870). pp.260—3 ; *HC*,

pp.15ff.

52) Barlow, *op. cit.*, pp.43, 82.

53) 司教と参事会との協働については、*HC*, pp.43－6, 52；Brett, *op. cit.*, p.197. プレシャーの事例としては, *HC*, pp.19－20.

54) *EHN*, pp.203－4；*HC*, p.21.

55) Nicholl, *op. cit.*, p.37.

56) "Monachi tamen Cantuarienses, quod iniustum affectare et impudenter petere non desistunt, set vigilando cogitantes, dormiendo computantes, de perdita professione dolore tabescunt, neque quibus modis eam reparent, dummodo optineant, quicquam attendunt." *HC*, p.15；Nicholl, *op. cit.*, p.38.

57) Nicholl, *op. cit.*, p.42.

58) *Ibid.*

59) *HC*, pp.29, 33.；Barlow, *op. cit.*, 82.

60) *WMGPA*, p.260；Nicholl, *op. cit.*, p.42.

61) Barlow, *op. cit.*, pp.82, 43.

62) Nicholl, *op. cit.*, p.42.

（本稿は平成元年度文部省科学研究費総合研究（A）の分担研究成果の一部である。）

The Medieval English Church and the Primacy Dispute (Part I)

Hiromichi YAMASHIRO

After the Norman Conquest, Lanfranc was appointed Archbishop of Canterbury in 1070. With William the Conqueror's support, he started reorganizing the English Church. Lanfranc initiated the policy of requiring professions of obedience from all the bishops. He demanded the same from Thomas I, Archbishop of York. But, Thomas insisted that both Archbishops were equal as metropolitans and that the precedence was placed to the one of earlier consecration. Thus, the Primacy Dispute focussed on primarily the problem of the profession of obedience which was demanded by Canterbury to York. Involving English kings and Roman popes, it lasted for half a century (1070s—1120s).

In this paper (Part I), chapter 1 pointed out three necessary viewpoints to be considered in order to clarify the characteristics of the Dispute: 1) personal character of each archbishop, 2) the relationship between each archbishop and his cathedral chapter, 3) personal relationship between each archibishop and the king / the pope. Then, chapter 2 analyzed the arguments and behaviors of archbishops and traced briefly the process of the Dispute.

In the next paper (Part II), chapter 3 will focuss on the reign of Thurstan, Archbishop of York, who managed successfuly to reject the profession of obedience to the Archbishop of Canterbury. Chapter 4 will ask the historical significance of the Primacy Dispute in the Medieval English Church History.